

▶ オーギュストロダン (AUGUSTE RODIN) = アイルランド

牡4歳・黒鹿毛 (アイルランド産・2020年1月26日生まれ)

父：ディーインパクト = 母：Rhododendron (母の父：Galileo)

馬主 : M.テイバー、D.スミス、J.マグニア夫人&ヴェスターベルク

調教師 : エイダン・オブライエン

騎手 : ライアン・ムーア

戦績 : 全15戦8勝、2着3回

総獲得賞金 : 約8億7,300万円

主な戦績 : '24 プリンスオブウェールズステークス (G1) 1着
'23 ブリーダーズカップターフ (G1) 1着
'23 愛チャンピオンステークス (G1) 1着
'23 愛ダービー (G1) 1着
'23 英ダービー (G1) 1着
'22 フューチュリティロフィーステークス (G1) 1着
'22 ゴールデンフリーステークス (G2) 1着
'24 愛チャンピオンステークス (G1) 2着
'24 タタソールズゴールドカップ (G1) 2着

オーギュストロダンはアイルランドで生産、調教された4歳牡馬。血統は父がディーインパクト、母がヨーロッパの大種牡馬ガリレオの子ロードデンドロンという良血馬です。ディーインパクトは説明不要の日本が生んだ大種牡馬。オーギュストロダンの他にヨーロッパのクラシック競走を制した馬たちにはビューティーパーラー(仏1000ギニー)、サクソンウォリアー(英2000ギニー)、スタディオブマン(仏ダービー)、ファンシーブルー(仏オークス)、スノーフォール(英愛オークス)がいます。母のロードデンドロンは現役時にフィリーズマイル、オペラ賞、ロッキンジステークスと1,600m~2,000mでG1を3勝、英1000ギニー、英オークス、ブリーダーズカップフィリー&メアターフで2着でした。

母の全妹マジカルは英チャンピオンズフィリーズ&メアズステークス、タタソールズゴールドカップ(2勝)、愛チャンピオンステークス(2勝)、英チャンピオンステークス、プリティポリーステークスでG1・7勝の名牝。祖母のハーフウェイトウヘブンは愛1000ギニー、サンチャリオットステークス、ナッソーステークスでG1・3勝、曾祖母のカサンドラゴーはキングズスタンドステークス(当時G2)など短距離重賞を3勝しています。その他の近親にはファーストレディステークス、ロデオドライブステークスの両G1を優勝したフォトコール、ブリーダーズカップジュベナイルターフ(G1)を制したヴィクトリアロードなどがいます。

エイダン・オブライエン厩舎から2022年6月、カラ競馬場の芝1,400m戦でデビューして2着だったオーギュストロダンは、続くネース競馬場の芝1,400m戦で初勝利を挙げ、3戦目のゴールデンフリーステークス(レパーズタウン、G2、芝1,600m)では残り200mで抜け出して重賞初制覇を飾りました。2歳最終戦は翌年のクラシックの登龍門とされるフューチュリティロフィーステークス(ドンカスター、G1、芝1,600m)で、直線コースの外ラチ沿いに進路を取り、後方からよく伸びて最後は3馬身半差をつけて快勝、4戦3勝で最初のシーズンを終えました。鞍上は2戦目(シーミー・ヘファナン騎手)を除いて全てライアン・ムーア騎手です。

3歳の初戦となった英2000ギニー(ニューマーケット、G1、芝1,600m)では断然人気に推されましたが、休み明けと重馬場が影響したのか、見せ場なく14頭立ての12着に終わりました。立て直して向かった英ダービー(エプソム、G1、芝2,410m)は中団の外から力強い末脚を爆発させ、先に抜け出したキングオブスティール(後に英チャンピオンステークス優勝)をかわして、半馬身差をつけて優勝。続く愛ダービー(カラ、G1、芝2,400m)も3番手から直線入り口で先頭に立つと、食い下がるアデレードリバーに1馬身半差で快勝、2016年ハーザンド以来となる英愛ダ

ービー制覇を達成しました。

しかし、この世代のナンバーワンとして 1 番人気で臨んだキングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス(アスコット、G1、芝 2,390m)は最終コーナー手前で急失速。最後は歩くようにして最下位 10 着で入線しました。英 2000 ギニーに続く不可解な大敗を喫しましたが、距離を短縮した 9 月の愛チャンピオンステークス(レパーズタウン、G1、芝 2,000m)で立て直しに成功。内の 3 番手から同厩舎で逃げたルクセンブルクを残り 200m でかわして、半馬身差で 4 度目の G1 勝ちを飾ります。陣営はこの年の最終戦にブリーダーズカップターフ(サンタアニタパーク、G1、芝 2,400m)を選択してアメリカに遠征。11 頭立ての後方に待機してペースが上がった 3 コーナーから内ラチ沿いをするすると上がって行くと、直線で鋭く伸びて快勝。2 着のアップトゥザマークに 3/4 馬身差、3 着のシャフリヤールに 1 馬身 1/4 差をつけて、このシーズンを締めくくりました。

2023 年のワールドベストレースホースランキングではレーティング 125 となり世界 8 位タイ、芝の L 部門(2,101m ~2,700m)ではイクイノックス(135)、凱旋門賞馬のエースインパクト(128)、“キングジョージ”の覇者フクム(127)、同 2 着のウエストオーバー(126)に次ぐ 5 位。シーズンで 4 つの G1 勝ちがありながら、ヨーロッパのカルティエ賞の最優秀 3 歳牡馬はエースインパクトに、アメリカのエクリプス賞の芝部門の最優秀牡馬もアップトゥザマークに譲る結果となりました。

今年は 3 月のドバイシーマクラシック(メイダン、G1、芝 2,410m)から始動し、ここは勝ったレベルスロマンスに対して後方のまま大きく離されてしんがり 12 着で入線しました。またしても不可解な負けを喫した後、本国に戻って出走した 5 月のタタソールズゴールドカップ(カラ、G1、芝 2,100m)は出遅れながらも先行集団に取り付いて、残り 200m 手前で一度は先頭に立ちましたが、直後にホワイトバーチにかわされて 3 馬身差の 2 着。満を持して臨んだロイヤルアスコット開催のプリンスオブウェールズステークス(G1、芝 1,990m)ではスタート直後に右によれて他馬と接触しましたが、4 番手追走から直線残り 400m を過ぎて抜け出すと、後続の追上げを 3/4 馬身封じて優勝、6 度目の G1 勝利を飾るとともにエイダン・オブライエン調教師に区切りの G1・400 勝目を贈りました。

前年の雪辱をかけて臨んだ 7 月 27 日の“キングジョージ”は 9 頭立ての 3、4 番手を進み、直線に入って先頭争いに加わったものの徐々にポジションを下げ、勝ったゴリアットから 11 馬身半差の 5 着に終わりました。続く連覇の懸かった 9 月の愛チャンピオンステークスは、6 番手あたりから良く伸びましたが、内に馬体を併せたエコミクスとの競り合いにクビ差遅れて 2 着に惜敗。それでも 3 歳のシンエンペラー(3 着)やロスアンゼルス(4 着)に先着し、「敗れて尚強し」を感じさせました。この後、エイダン・オブライエン調教師は馬場状態が回復することを条件にぎりぎりまでオーギュストロダンの凱旋門賞出走の可能性を探りましたが、ジャパンカップに照準を合わせました。

通算成績は 15 戦 8 勝、2 着 3 回。これまでに挙げた 8 勝の内訳は 1,800m 以下で 3 勝、2,000m(1,990m 含む)で 2 勝、2,400m 戦(2,410m 含む)で 3 勝。左回りは 7 戦 5 勝、2 着 1 回。良馬場では 9 戦 5 勝、2 着 2 回、重、不良馬場では 3 戦 2 勝となっています。芝 2,400m の持ち時計は、サンタアニタパーク競馬場のブリーダーズカップターフでの 2 分 24 秒 30(良馬場)です。11 月 10 日までのレースが対象のロンジンワールドベストレースホースランキングではレーティング 122 で世界 11 位タイ、芝の I 部門(1,900m から 2,100m)ではシティオブトロイ・ヴィアシステイナ(127)、カラダガン(125)、エコミクス(123)に次ぐ 5 位とタイなっています。



2024 年プリンスオブウェールズステークス
(Photo: Edward Whitaker)

● 馬主：M.テイバー、D.スミス、J.マグニア夫人&ヴェスターベルク (Michael Tabor, Derrick Smith, Mrs John Magnier& Westerberg)

ジョン・マグニア夫人は、故ヴィンセント・オブライエン調教師の愛娘スーザンのことで、現在はクールモア牧場の経営者、ジョン・マグニア氏の妻。ジョン・マグニア氏はイギリス人のロバート・サングスター氏と共同で 1975 年にクールモア牧場を購入し、世界最大級の牧場へと導いた功労者です。サングスター氏が去ると、マグニア氏はイギリス出身のマイケル・テイバー氏を新たなパートナーに世界戦略を進め、その後イギリス人のデリック・スミス氏がメンバーに加わりました。

クールモアグループはアイルランドを拠点に、アメリカとオーストラリアに支場を有し、その屋台骨を支えた種牡馬であるサドラーズウェルズ、デインヒル、ガリレオの産駒でヨーロッパの G1 戦線を席卷し、世界でも数多くの G1 タイトルを獲得しています。アイルランドでの所有馬はエイダン・オブライエン、息子のジョセフ、ドナカの各調教師が手掛け、フランスではアンドレ・ファーブル、アメリカではトッド・プレッチャーら著名調教師へ預託されています。

クールモアの所有馬はこれまで上記 3 氏による共有名義が基本でしたが、著名な自動車メーカー、オペルの創業者の曾孫であるゲオルク・フォン・オペル氏の競馬法人「ヴェスターベルク」も近年では名を連ねることが多くなっています。

● 調教師：エイダン・オブライエン (Aidan O'Brien)

1969 年 10 月 16 日、アイルランドのウェックスフォード州生まれ。調教師の家庭に育ち、ジェームズ・ボルジャー調教師に師事して 23 歳で障害調教師となり、1993/1994 年シーズンから 5 季連続でアイルランドのリーディングタイトルを獲得。アマチュア障害騎手としても 1993/1994 年にリーディングに輝きました。また、アンマリー夫人はアイルランドの障害リーディングトレーナー、長男ジョセフ、次男ドナカは騎手から調教師に転身しています。

ヴィンセント・オブライエン調教師の引退を受けてクールモアの専属調教師となり、アイルランド(平地、賞金順)で 1999 年から本年 2024 年まで 26 年連続、また、イギリス(賞金順)でも 2001、2002、2007、2008、2016、2017 年とリーディングタイトルを獲得し、今年は 7 回目の首位が濃厚となっています。ここまでクラシックレースだけでも英 2000 ギニー 10 勝、英 1000 ギニー 7 勝、英ダービー 10 勝、英オークス 10 勝、英セントレジャー 8 勝、愛 2000 ギニー 12 勝、愛 1000 ギニー 10 勝、愛ダービー 16 勝、愛オークス 7 勝、仏 2000 ギニー 5 勝、仏 1000 ギニー 1 勝、仏ダービー 1 勝、仏オークス 1 勝。さらに、キングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス 4 勝、凱旋門賞 2 勝、ブリーダーズカップターフ 7 勝のほか、イタリア、カナダ、アラブ首長国連邦、香港、オーストラリアなど世界各国で G1 タイトルを手中にし、今年 6 月に本馬で制したプリンスオブウェルズステークスで、平地での G1 勝利数は 400 に達しました。2017 年にはアメリカの故ロバート・フランケル調教師が 2003 年に樹立したシーズン G1 最多勝記録を 3 勝更新する 28 勝を挙げたほか、ロイヤルアスコット開催での通算勝利数(91 勝)も歴代最多です。

今年も英ダービー、エクリプスステークス、英インターナショナルステークスを制したシティオブトロイをはじめ、アスコットゴールドカップ、グッドウッドカップ、愛セントレジャー、カドラン賞を勝ったキプリオス、愛ダービー馬ロスアンゼルス、モイグレアスタッドステークス、チーヴァリーパークステークスを制したレイクヴィクトリアなどでヨーロッパの G1 戦線を席卷しています。また、アメリカでもウォームハートでペガサスワールドカップターフ、レイクヴィクトリアでブリーダーズカップジュベナイルフィリーズターフ、アンリマティスでブリーダーズカップジュベナイルターフを制しています。これまでジャパンカップに管理馬を 6 頭出走させ、2004 年パワーズコート、2010 年ジョシュアツリーとともに 10 着、2017 年はアイダホで 5 着、2018 年はカプリで 11 着、2021 年はジャパンで 8 着、ブルームで 11 着でした。

● 騎手：ライアン・ムーア (Ryan Moore)

1983年9月18日、イギリス・バークシャー生まれ。父ギャリーは元障害騎手で引退後調教師、祖父も元調教師、弟のジェイミーも障害騎手として活躍。2000年5月に障害戦でデビューして初勝利を飾ると、2003年に見習騎手リーディングに輝き、2006、2008、2009年には総合のリーディングタイトルを獲得しました。

2006年にマイケル・スタウト調教師管理のノットナウケイトで英インターナショナルステークスを制して初めてG1を勝利すると、近年は主戦を務めるエイダン・オブライエン厩舎の所属馬でG1勝鞍を量産。クラシックは2010年ワークフォース、2013年ルーラーオブザワールド、2023年オーギュストロダン、2024年シティオブトロイで英ダービー4勝、2010年スノーフェアリー、2016年マインディング、2020年ラブ、2022年チューズデーで英オークス4勝、さらに英2000ギニー2勝、英1000ギニー4勝を挙げているほか、“キングジョージ”は2009年コンデュイット、2016年ハイランドリールで2勝。国外でも2010年ワークフォース、2016年ファウンドによる凱旋門賞2勝を始め、2008・2009年コンデュイット、2013年マジシャン、2015年ファウンド、2023年のオーギュストロダンでブリーダーズカップターフ5勝、プロテクションистで勝った2014年メルボルンカップなど世界各国でG1勝利を収めています。

今年も世界各地を転戦したため、イギリスでは202戦48勝でリーディング23位に留まりましたが、欧州ではシティオブトロイとのコンビでG1・3勝、キプリオスでG1・4勝、ロスアンゼルスで愛ダービー、ルクセンブルクでコロネーションカップ、ポータフォーチュナでファルマスステークス、オペラシンガーでナッソステークス、コンテンツでヨークシャーオークス、アメリカでもウォームハートでペガサスワールドカップターフなどタイトルを積み重ね、今年8月のホイッスルジャケットでのモルニー賞で通算G1勝利数が200の大台に乗りました。

日本では2004年の京王杯スプリングカップで初来日し、2010・2011年にスノーフェアリーでエリザベス女王杯を連覇。2019年までと2022年及び本年は短期免許を取得して騎乗し、2013年にジェンティルドンナでジャパンカップ、アジアエクスプレスで朝日杯フューチュリティステークスを、モーリスで2015年マイルチャンピオンシップ、2016年天皇賞(秋)を、ゴールドドリームで2017年チャンピオンズカップを、サリオスで2019年朝日杯フューチュリティステークス、ヴェラアズールで2022年のジャパンカップを制するなど、ここまで重賞17勝を含むJRA通算767戦145勝(11月10日終了時点)。2010年にはワールドスーパージョッキーズシリーズで総合優勝を果たしています。